

視察・研修報告書

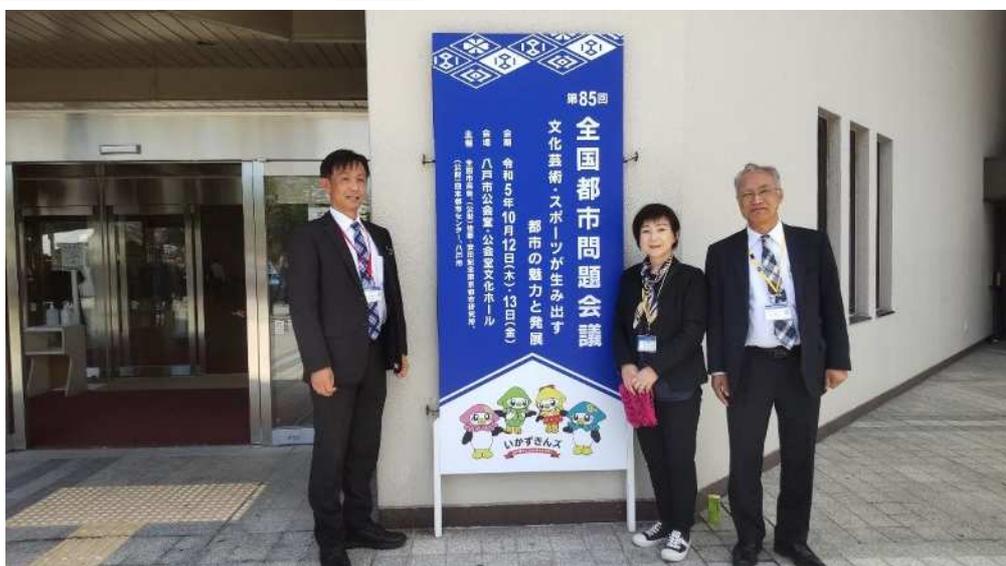
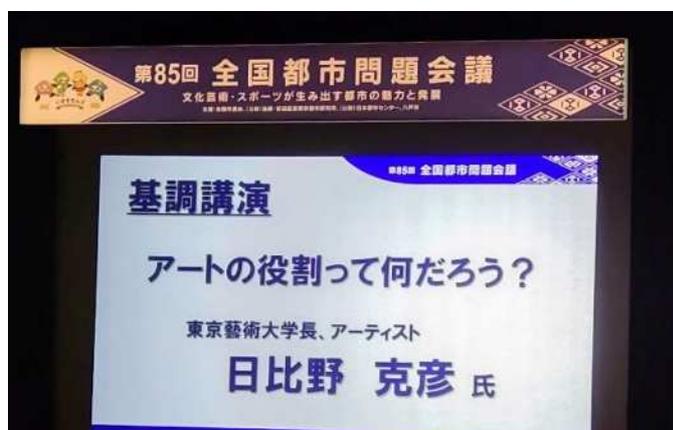
視察・研修先	第85回 全国都市問題会議
日時	令和5年10月12日(木) 9時30分～12時00分
場所	八戸市公会堂
テーマ	基調講演 「アートの役割ってなんだろう？」
対応者 (講師)	日比野 克彦 (東京藝術大学長)・アーティスト
概要	
<p>日比野氏は東京藝術大学長であるが「アーティスト」として、芸術と言う点から講演を行ってくれました。</p> <p>【はじめに】</p> <p>・アートとは？</p> <p>美術・音楽・演劇などの表現形態をイメージする方が多いと思うが、アートとは人に及ぼす機能・可能性を表し、社会において関わりを持ち必要なものである。</p> <p>【アートは生きる力】</p> <p>アートに欠かせないのが「イメージする力、想像力」である。想像する力は昔のことを思い出したりする事が出来、1年先のことを考えたりビジョンを立てたり出来る。想像力は過去のこと、未来のことも自由に考えることが出来る。想像力を備えているアートと出会うことは、人が人らしく生きていくために重要な役割を持っている。アートは「人が生きていく力」である。</p> <p>【アートは多様性】</p> <p>現在社会において「多様性の価値観」はとても重要である。障害の有るなし、様々な自分らしい個性を排除しない社会。例えば、10人で一つのリンゴの絵を描くにしても10人いれば様々な角度や視点からリンゴの絵を描き、それは異なる絵であっても全て正解のリンゴの絵である。</p> <p>「他者との違いがその人の個性であり」アートは多様性ある社会を築く基盤である。国連が掲げている「SDGs」では17の目標がたてられ、169のターゲットがあるが、この中には「アート」が含まれていない。しかし、人間社会において必要であると思う。そこで『「SDGs × ARTs 展」～アートには人の心を動かす力がある～』を開催しアートから地球規模の環境問題、エネルギー、教育、差別、貧困、差別、平和など様々な社会課題に取り組んできた、どの様な環境でもアートは存在し得ること出来る。</p> <p>【アートっていったい何だろう】</p> <p>想像力を備えているアートは、ひとの生きる力になる、ひとりひとりの異なった個性と言う価値観を「アートが繋ぐものになっている」。心に作用するアートは社会的課題に取り組んでいく上で大切なものになる。私たちが日常の中で自己を見つめたり、人と接したり、社会を変えたいという気持ちになった時、いつもそこには「アート」が必要な気がする。</p>	

所 感

講師の日比野克彦氏は、アーティストとして良くメディア等で見たことがあったが、実施に話を聴くのは初めてであった。

今回講演をお聞きして芸術を理解するには少し難解であった。それは、「芸術」と言う幅の広い様々な無形なものは、「言葉や表現」では分かりにくかった。視覚的な感覚や表現は個人個人によりそれぞれ感じ方が異なり正解もなければ誤りでもない。しかし、「アート」のように、人々の心や感情に大きく関わり変化し、気持ちや考え方に大きな影響を及ぼし、決して軽く考えるものでは無いと感じた。

講演の中の話の「リンゴの絵」はまさにそうである。描き方一つで感じ方は大きく違うし、「うまい」「へた」で判断できない、「絵」から湧き出てくる強さや表現力が「合うか」「合わないか」であり、評価する事は出来ないもので特に現在においては「多様性」と言う言葉で捉えると、みんな良くて・全て良いである。



-作成者 河村 康之-

視察・研修報告書

視察・研修先	第 85 回 全国都市問題会議
日 時	令和 5 年 10 月 12 日 (木) 13 時 10 分～16 時 30 分
場 所	八戸市公会堂・公会堂文化ホール
テーマ	文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展 「一般報告」
対応者 (講師)	一般報告 3 名 ・吉川由美 氏 ・花岡利夫 氏 ・鈴木秀樹 氏
概 要	
<p>1. はじめに</p> <p>文化芸術・スポーツは、都市の魅力創出と持続的な発展にとって極めて重要な役割を果たしうる。しかし、一方でそれはあくまでも可能性の領域にとどまっている。文化芸術・スポーツに秘められた可能性を現実のものにするためには、文化芸術・スポーツはいかにして都市の魅力と発展に寄与するのか、そして都市自治体側はそこにどのように関わるべきか、あるいはどのような点に気を付けなければならないのかなど、解消しなければならない疑問は少なくない。</p> <p>第 85 回全国都市問題会議では、「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」のテーマを基に都市問題に求められる視点として、①理念・ビジョンの確立②粘り強い継続的な取り組み③市民の主体性の発揮が挙げられ、3 氏による実践・一般報告があったので下記にまとめた。</p> <p>この研修を通して、文化芸術・スポーツ推進にあたっては市民の多様なニーズに対応できるように、また大野城市のまちづくりに反映できるのではと考えている。</p> <p>2. 一般報告</p> <p>①「まちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれる」</p> <p>—文化事業ディレクター、演出家— 吉川由美 氏</p> <p>○まちのリノベーションと「はっち」の誕生</p> <p>・2011 年 2 月に八戸市は中心街再生の起爆剤とすべく、「八戸ポータルミュージアムはっち」を開館。市民を主体とする活動の拠点となるように、八戸の人々の営みを、ビジターが知り、疑似体験できる施設とした。</p> <p>目的：明確なビジョンで、アートの力で中心市街地の再生を行う市政を目指した。</p> <p>企画：当時のまちづくり文化観光部まちづくり推進室</p> <p>運営：まちづくり文化振興、観光分野の市職員、任用職員のコーディネーター、そして観光、文化芸術、広報各分野の非常勤ディレクター</p> <p>成果：まちを再生する市民力をブーストするには、市民が自分事として参加できる、分野を横断し壁を揺さぶるようなアートプロジェクトが必要だと考えた。</p> <p>地域に根差したテーマを探した。はっちの最上階のレジデンスに滞在しながら、リサーチと制作を行った。</p> <p>無言のコミュニケーション：山本耕一郎による「八戸のうわさ」は、中心街のお店や事業所のみなさんに取材した個人的なエピソードを吹き出しにして店のウィンドーなどに掲示。</p>	

開館記念の「八戸レビュー」：88人の市民に88組の市民を取材してもらった。

それぞれのエピソードを執筆、そのエッセイをもとに梅佳代、浅田政志、津藤秀雄の3人の写真家がポートレイトを撮影、最終的に400人以上の市民が参加した。

結論：インターネット社会は世界を均一化し、デジタルでは誰もがグローバルに最先端のアートと出会え、誰もが名立たる表現者になるチャンスに恵まれている。そんな時代だからこそ、分子としての文化政策より分母を支える文化政策が求められている。祭りのように、経済のうねりが地域文化を疲弊させてしまう危険を見極めつつ、まちのソフトパワーと地域社会の分母を担う人づくりを意識していくこと、地域の活力と魅力の源泉は”地域の文化”ということから、そのあり方を考えたいものである。

②「標高差1,500mの地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出」

—長野県東御市長— 花岡利夫 氏

概要：長野県東御市は、平成16年(2004年)に東部町と北御牧村の2町村が合併して誕生。長野県東部に位置し、人口約3万人の小さな市である。

高低差のある地形を活かして古くから名馬の産地として栄えた。戦国時代には梅野氏の糸を引く真田氏が武田信玄の臣下として目覚ましい活躍を見せたり、江戸との交通も頻繁であり善光寺への参詣客も多くあったりするなど、昭和62年には「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、観光の要所でもある。

目的：平成30年に文化芸術やスポーツの一層の振興および身近な文化芸術やスポーツが持つ「魅力」や「可能性」を再認識し、総合的かつ効率的に推進できる体制の構築とともに、標高差のある地域の資源や特性を活かした「まちづくり」を図るため「東御市スポーツ推進計画」と「東御市文化芸術推進計画」を策定。

改革：文化芸術行政とスポーツ行政を市長部局へ移管。

成果：・まちの特徴を活かすためにまずワイン醸造に注目。市長就任から7か月で、長野県内初となるワイン特区認定を取得し、現在市内では14軒のワイナリーがワイン醸造を行っている。

・「湯の丸高地トレーニング施設」の設立

スポーツ選手の高地トレーニングとして脚光をあびた。水泳の高地トレーニング施設として適地として、日本水泳連盟が視察に訪れ、湯ノ丸高原の1,750mという標高に興味を持たれた。

スポーツ施設は公費負担・運営の考え方でなく、施設の設置によって利益を得る者(ステークホルダー)等と相互に協力し合うという改革。運営に対しても応分の負担をし、地域とともに支えるという新方式スタイルで行った。

令和3年の夏の東京オリンピックで競泳ニッポンが獲得した金メダルは大橋悠依選手の2つ。当時の日本代表ヘッドコーチだった平井伯昌氏からは「東御の施設があったから大橋の金があった」との言葉をいただいた。「東御から世界へ」は地元ならず、これからの競泳ニッポンの合言葉になっている。

③「まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用」

—(株)鹿島アントラーズFC取締役副社長— 鈴木秀樹 氏

概要：1993年に10クラブでスタートしたJリーグ(日本プロサッカーリーグ)の加盟クラブは30年の月日を経て、60を数えるまでになった。

・鹿島アントラーズはいかにまちづくりに携わっているのか。

アントラーズが本拠地を置く地域はかつて、のどかな農漁村だったが、高度経済成長期の1960年代に始まる鹿島臨海工業地帯の開発で様相ががらりと変わったことに伴い雇用が生まれた。しかし、近隣に娯楽施設がなく、若者の首都圏への流出が社会問題となっていた。そのため、鹿島町、神栖町、波崎町(当時)が有識者とともに「楽しい街づくり懇親会」を立ち上げ、論議を重ねた。

そうした中に、日本サッカー協会によるJリーグ構想が目にとまり、「サッカーによるまちづくり」に舵を切ったのが始まりである。

・以後、鹿島アントラーズによる地域の社会課題解決を使命と捉え、数々の事業に取り組み始めたのである。

アントラーズが本拠地を置く地域には、高度な医療、教育機関に乏しかった。

2015年、カシマスタジアムに隣接する「アントラーズスポーツクリニック(ASC)」を設立し、域外からの雇用・移住促進に繋がった。(鹿嶋市人口6万5,000人中、ASC診察券を持つ患者数は4万人を超えている。)

鹿嶋市、アントラーズ、その親会社であるメリカリの3社は「鹿嶋市における地方創生事業に関する包括連携協定」の協定を締結している。

また、アントラーズは定期的なアンケートを実施している。道路の渋滞や交通アクセスなどの課題は、鹿嶋地域の課題であり、克服しなければならない重要な課題である。

提言：自治体に臨みたいのは、地域の貴重な資源を有効活用すれば、自治体だけではできないことが可能となる。もっとプロスポーツクラブの力を引き出し、使い切っていたきたい。

所 感

○日本は長い歴史を誇るプロ野球、バスケットボールのBリーグを合わせると、全国に100を超えるプロスポーツが存在する。他に、完全なプロ化に至ってはいないが、ジャパンラグビーリーグワン、バレーボールのVリーグ、卓球のTリーグのクラブも日本各地に散らばっている。そのほとんどのクラブが本拠地を置く地域に根を張り、地域の象徴的な存在となって、地域に活力を与えることを目指している。福岡は野球やサッカーなどプロスポーツクラブを抱え、その活躍を日々話題にし、心のよりどころにしているのは確かである。

○まちづくりに反映させていくための文化芸術・スポーツの施策の方向性は、大野城市も策定しているが、現実是一部市民のみの参加型ではないだろうかと終始考えさせられた。今後、大野城市のまちづくりに反映できるように、さらに調査研修していきたい。

-作成者 大塚 みどり -

視察・研修報告書

視察・研修先	第 85 回全国都市問題会議
日 時	令和 5 年 10 月 13 日
場 所	青森県八戸市公会堂・公会堂文化ホール
テーマ	文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展
対応者 (講師)	【コーディネーター】 東京大学教授 (小林 真理) 【パネリスト】 imajimu 代表取締役 (今川 和佳子) 拓殖大学教授 (松橋 崇史) 沼津市長 (頼重 秀一) 京都府綾部市長 (山崎 善也)
概 要	<p>10 月 13 日 (金) 二日目 9 : 30 より (パネルディスカッション)</p> <p>冒頭コーディネーターである「小林真理」氏より、「一巡した文化芸術を活用したまちづくり～自治体文化行政から魅力的なまちへ～」と題しあいさつがありました。要点としては、文化施設運営の反省と転換の中で文化政策 (スポーツも含む) は、地域に眠っている文化を守り掘り起こし作り、人と人を繋げていく役目であり横串である。その中で活気溢れる企業やまちづくりを行っていく。</p> <p>次に【八戸の独自性が生み出してきたもの】と題して imajimu 代表取締役の「今川和佳子」氏より発表があり、第一に「全国でも前例を見ない施設」として 2011 年 2 月に「八戸ポータルミュージアムはっち」が誕生、美術館でもない、公民館とも違う、複合的な機能を持つ、「貸館事業」「自主事業」「会所場づくり事業」自主事業は観光からアートまで歴史・伝統をテーマにしたものから現代ものまで、そして全体を貫いているのが「八戸という地域を再発見する」というコンセプト、そして「まちなかミュージアムワークショップ (MWM)」という市民活動団体 (食・子育て・観光・教育) さまざまな分野で活動する多様な市民の集まり多いときで 100 人のメンバーが参加、また八戸には夏の「八戸三社大祭」冬の「八戸えんぶり」があり 2023 年に 4 年ぶりの開催となった八戸三社祭では 27 の山車政策やお囃子の練習、また情報発信に取り組む人たちによって地域の魅力を再発見し活力を生むものとなった。</p> <p>次に【地域活性化におけるスポーツの役割とその変化】と題して拓殖大学商学部教授の「松橋崇史」氏より発表があり、プロスポーツクラブの創設・育成、スポーツイベントの誘致・開催・運営等、として Jリーグは地域密着を理念に「地域+愛称」を掲げ 1993 年に開幕した。しかしながら多くのクラブは経営不振になり企業だけに依存できないようになった、そこで「地域密着」の経営戦略としてサポーターを増やし地域の支援を図るようにしていった。トップクラブの活躍を求める姿は以前にもあった、秋田杉の輸出港として林業・木材加工業で栄えた能代市においては、県立能代工業バスケットボール部が長く黄金期を築いた、また鉄鋼業で栄えた釜石市でも新日鉄釜石ラグビー部が前人未踏の 7 連覇を果たしたことがあった。国内では近年パラスポーツが身近になった、学校でのボッチャの取り入れ、健常者と障がい者が共に行う競技、多様性を体現する取り組みは、変化するスポーツの特徴をとらえること、もしくは新たな価値を見出すものである。</p> <p>次に【スポーツとアニメを活用したにぎわいの創出】と題して沼津市長「頼重秀一」氏の意見発表が行われた、スポーツを生かしたまちづくり、Jリーグクラブ「アスルク</p>

「ラロ沼津」のホームスタジアムがある「愛鷹広域公園」・沼津総合体育館「香陵アリーナ」フェンシング交流拠点施設「F3BASE（エフスリーベース）」、BMX や MTB（マウンテンバイク）の遊び場・練習場施設「DKFREERIDE MTBPARK」とさまざまなスポーツ施設がある。国民体育大会のフェンシング競技会場となったことがきっかけで、複数の高校でフェンシング部が創設された、平成 31 年フェンシングのまちづくりがスタートした。「フェンシングのまち沼津」を目指し、①フェンシングの裾野拡大、②シンボルフェンサーの育成、③大会・合宿の誘致、④フェンシングの環境整備に取り組む。

アニメ『ラブライブ！サンシャイン！！』を活かしたまちづくり、学校を舞台としたスクールアイドルグループ「Aqours」の奮闘と成長を描く物語、本市内内浦地区に聖地巡礼として多くのファンが訪れるようになる。地域の取り組み、商店街のフラッグ掲出、バス・タクシーのラッピング、特産品とのコラボ、旅館業組合のパズルラリーの開催など、スポーツ、アニメを通じ地域資源の掘り起こし、魅力発信により訪れた方との交流が生まれ新たなビジネスモデルもできました。

次に【文化芸術・スポーツで紡ぐまち・綾部】と題して綾部市長「山崎善也」氏から意見発表があり、綾部は立地が良く舞鶴若狭自動車道・京都縦貫自動車道の 2 路線が交差、JR 山陰本線と舞鶴線がありゲンゼ株式会社、日東精工、オムロン、京セラなどのハイテク企業もあり、“ものづくりのまち”でもある。2011 年「国民文化祭」において「里山合唱フェスティバル」が開催、多くの市民が文化芸術に触れ親しむ機会の充実を図り、「市民一人 1 文化」の推進で、合唱のまち綾部を標榜し多くの合唱グループが生まれた。また綾部踊りや綾部太鼓が共演する「ドンドコ夏祭り」の開催、「市民 1 人 1 スポーツ」ではソフトボール大会、駅伝大会、サイクリング、カヌー、トレッキングなどを行っている。

所 感

文化芸術、スポーツは人と人を繋ぎ平和をもたらす、豊かな情操を育み人格形成にあたりとても重要である、そこに住む人が豊であり平穏な生活を送ることが大事であり文化芸術・スポーツはその手助けとなる、また豊かな人々が携わる文化芸術はそれそのものが魅力的なものとなると思う。その地域は魅力的な地域となり、多くの人がある魅力的な文化芸術・スポーツに自分も触れたいと思いその地を訪れる事となると思う、それが地域の活性化にもつながっていくものと信じる。

-作成者 神田 徳良-